

第三章

解読への道：絵

3.1 絵と文章の関係

絵から文章を理解しようと空しい試みを繰り返し、困惑・苛立つ研究者たちは、おそらくページ全てで、絵と文章には何の関係もないのだろうと主張する。絵はたぶん「おとり」で、解読者たちを欺くように仕向け、さらに全く異質の文字を使い危険な秘密を隠したのだと彼らは主張する。しかし非常に真剣にこの手稿に関わる研究者たちは文章と絵が一緒に描かれ、そして全てにおいて関連した構成を持っていることに気づく。例えば Elizebeth Friedman は「文章を書いた人物と絵を描いた人物は同じであり、筆跡鑑定の専門家なら誰もが納得するはずだ。」と言う。(1962)

A. H. Carter 博士は上の意見に同意し、「なぜなら絵と文章には同じインクが使われ、筆使いも同じであり、そして文章が絵の一部となっているものが多数見られる。これはおそらく文章を書いた人物と絵を描いた人物が同一であるからだろう。」(1946, p. 1) Tiltman は「全くその証拠がないのとは反対に」文章が絵と関係あると考えて間違いないだろうと考えていた。(1968, p. 11) 文章は複雑に絵の中や周囲で混ざり合っているのも、もし文章を書いた人物と絵を描いた人物が異なるのなら、かなり緊密な協調作業があったはずだと手稿を注意深く研究した人たちは考えている。文章が絵の上に書かれている場合もある。(例えば多くの研究者が「薬草壺」と呼ぶ f99r, f102v2 に描かれる物体と、f85-86 の占星、宇宙画に見られる複雑な図中の小部屋に書かれたラベル。)

3.2 絵の性質と特徴

最近になって手稿のフォトコピー（研究者が最も目にする形式である。）を初めて目にする研究者にとっては、それが非常に奇異で、風変わり、異質なものであると感じるようだ。さらには地球上のものではないと言う人までいる。特徴的な中世の彩色写本を目にしたことのある読者なら、手稿のページはそれらから期待されるものより遥かに異なるものである。少なくとも私にとって、集中的に何週間かフォトコピーを調べた後では、初めに感じたその顕著な「奇異さ」は薄れ、次に要約するように、より思慮深い受け止め方をするようになった。

均質なスタイル。私は絵と文章は手稿全てを通して一様だと思う。もし一人の人間の手によるものでないとしたら、それはある学校、または集団の中で非常に近い人々が一緒に作り出したのだろう。

職人とプラグマティズム（実用主義）。その筆記者（または筆記者たち）は今日でいう写実主義的デザインや美の基準から動機付けられていたとは考えにくい。多くの植物ページといくつかの宇宙の図画（特に 9r, 11v, 16v, 33v, 41v, 49r, 68v2, 67r1, 67r2, 68v1）は質的にしっかりして大胆な巧さを持った設計であり、それは私にとって全く喜ばしいことだ。

私が受ける印象は美術的な感じより、むしろ職人的作品であることを強く感じさせる。

構造的な不変さ。私は法則と関連性の存在を確かに感じるし、今日のコセプトと比べたときには常軌を逸し、奇想天外なものではあるが、それは独自の「論理」を持つ確かな構造である。筆記とその事実は複雑に混ざり合った形式というよりも、むしろ質素なスタイル全てが職人的印象と論理的構造があるように私は印象を受ける。以下に示そうと考えているが、図の中には似た特色があり、様式化された形式は記号と、そしてさらに複雑な記号を表すのに使われているように思える。この「構造的に優れた」特色の一部分は絵のスタイルに構造上の要素があり、三次元形式、調和、部品の関連性を強調している。

特異性、独特の特性。何人からも報告されたように、この手稿は他のどんな、たとえ僅かに比較できる文書と比べても、全くかけ離れたものであるように思える。私の知る限り、これ以外の発見をした人はいないはずだ。閲覧をした人は強くそれは知られている様式・原理から全くかけ離れていると主張するようになる。個人もしくは少人数のグループが独自に、計画的に制作したと考えられる。(この独自性はもちろん、単にこれに関係している他の文書や思想が発見されていないだけかもしれない。しかしこの手稿を調査した多くの著名な中世・ルネサンスの学者達がいろいろな文書と比べて何の関連性も認めることができなかつたということはあるに違いないだろう。) セクション 3.2.1 で私はヴォイニッチ手稿と比較できるであろう他のマニュスクリプトについて議論する。

以上は私が感じた手稿の印象を語ったものであり、以下では他の研究者の反応を見ることにする。

3.2.1 起源とスタイル

Voynich はこの手稿と他の典型的な中世マニュスクリプトを比べた彼の印象をやりとりしている。「それは他のマニュスクリプトの豊かな装飾・色彩と比べると醜いアヒルの子であり、私の興味はすぐに覚めてしまった。」(1921, p. 415) Carter 博士は手稿の作者、羊皮紙、スタイルに重点を置きそれについて詳細に述べている。彼の個人的な反応は次のようである。「絵は絵画的な心地よさよりも、むしろ詳細部分に細心の注意を払って描かれた。それらはつまり Miss Nill が指摘するように、絵は本の美しさを強調する目的ではなく、科学者が自分自身のために書くような類のものである。」(1946, p. 1)

研究者の中には程度の差はあるが、はっきり主題を持った正確な描写としての絵の質に同意しない人もいる。その美術的な質についてもかなりの不同意がある。(驚くことではない。) ある人は喜び、他の人たちはそれらを不器用、下手、子供じみたものと感じる。Scientific American 誌には、ある匿名の著者からの批判と軽蔑的意見が掲載された。「これらの絵は一人の人物によって雑に描かれた。彼には、たとえ 13 世紀にしても、明らかに美術的才能が欠けている。」(1921, p. 432) そしてこの著者は続くページでも同じような意見を述べている。「作者は美術的に成功していない。彼の努力は時々私たちに、私たちが制作者に対して何を望み、どのようにそれを欲するのかを強く印象づけるありのままの概要を思い出させる。」(p. 439) Charles Singer は Tiltman へ宛てた 1957 年 11 月 12 日付けの手紙の中で同じように植物の絵の描写力、美術的質への軽蔑を「植物画は全く植物学的なものではなく、落書きや、子供が植物を描くときのそれである。」と述べている。

以下(セクション 4.1.1)で筆記についての議論するが、一方多くの研究者が手稿の年代や起源を判断する際の要素として絵のスタイルに言及している。しかしさらなる特定は行われず単に「専門家」を曖昧に参照するだけで、誰も彼らの注目を支持する真実を提供してはいない。以前見てきたように Steele は「作者が全く中世・ルネサンスの影響を受けていないことは奇妙である。」と述べている。(1928b, p. 563) Carter (1946)は女性が「丸く太って」描かれていること、「ゴシック」様式が見当たらないことを年代の 13, 14 世紀より後の証拠としている。Panofsky (1954, p.1)は絵のスタイルを「地方の様式」と考え、また彼はイタリアルネサンスの影響を受けた証拠が見当たらないと述べている。総合すると、私たちの疑問に答えてくれるようなヴォイニッチ手稿と他の様々な起源・年代のマニユスクリプトを比較・参照する注意深くかつ分類的な試みは行われていないように思える。

3.2.2 羊皮紙とインク

Carter 博士は羊皮紙について詳細に報告している。かなり長いものだが全文引用に値する。なぜなら白黒写真以外を見たことのある研究者は僅かしかいないからだ。

"Some of the colors appear to be colored ink or water color, some a kind of crayon, and some an opaque kind of paint like poster paint. There are many colors; the ink is good strong brown; there is an amber-like ink, like British-tan leather goods; a bright, not quite brilliant, blue ink or water color; an opaque aquamarine; a good strong red, carmine rather than scarlet or vermilion; a dirty yellow (the yellow and browns of the sunflower illustration are like those, only a little faded, of the Van Gogh sunflower picture; the greens are less brilliant); a red that looks like a bloodstain about a week old; a dirty green; an opaque green; a kind of green crayon; and several other greens of various hues, intensity, value, and texture; a red that looks like face rouge in color and texture; a thick red that makes dots of color that you could scrape with your finger nail; a red ink just like ordinary red ink today; a blue that sparkles with tiny fragments (not apparently by design).

"Some of the colors are flowed on as with a brush; some have left pigment-bordered contours as where a little pool had stood unblotted. Some may have been blotted (with cloth?). Some were applied with strokes of the quill, and some were scrubbed into the vellum with a blunt quill which had become furry on the end as a wooden stylus does after repeated use." [Carter 1946, p. 2]

3.2.3 他のいくつかの、絵が描かれたマニユスクリプトとの関係

私の資料は残念ながらこの主題についてほとんど言うことはない。正しかろうが正しくなからうがこの奇妙な絵と、何を描いたのかはっきり特定できない困難さが、通常の中世マニユスクリプトの研究者のほとんどに、一目見ただけでうんざりさせるような印象を与えている。すべてを備えた「植物」の絵、そして星座の絵が描かれた占星図は、おそらく最も他の植物や星座の絵と比較できる見込みがあるだろう。Panofsky (1954, p.1)は次のよ

うに問題を提起している。「ヴォイニッチ手稿とほんの僅かながら比較できる通常の言語で書かれたマニュスクリプトは、不幸にも最小4つある。第一に植物。第二に宇宙・占星。第三に狭い範囲での医学。第四におそらく錬金術。」彼は13世紀の修道士 Opicinus de Canistris の神秘的な絵が宇宙・占星図と比較調査する価値があるかも知れないと示唆している。Petersen 神父 (1953, p. 2) は St. Hildegarde of Bingen の幻視の文字と絵がおそらく比較可能であり、そして彼はいくつかの占星図がヴァチカン写本 1906 と類似していることを挙げている。

Tiltman は「私の知りうる限りでは、誰もどんな中世マニュスクリプトや初期の印刷本との関係を見つけることができていない。これは中世から16世紀まで、いや17世紀までずっと植物を主題にした書物と絵がとても限られたものであったことを考えると全く奇妙なことである。」と重要な意見を述べている。(1968, p. 11) Elizebeth Friedman は彼女自身と William Friedman の意見としてはっきりこう述べている。「知られている限り...全く鍵や crib がない。」(1962) (これら聞き慣れない暗号の専門用語「crib」とは未知の文章を解読するために用いられる既知の平行・比較できる文章のことであり、例えばロゼッタストーン上にかかれた3つの異なった文字の平行碑文があり、それらはエジプト象形文字を解読するために用いられた。また crib は推測される主題や、未知の文章のある場所において見つかる個々の単語の形を取ることができる。)

Opicinus de Canistris (A.D. 1296-ca. 1336) について、R. Salomon (1936) はこの修道士の幻視そして神秘的な絵について記載し、それら膨大な絵を載せている。イタリアのパヴィアで生まれた Opicinus は辛苦に満ちた生涯であった。彼は子供の時に転び、頭に傷を負った。この不幸が後の病気と幻視の原因の中心をなしたのだろう。その記録は注目すべき本の絵として記録され、Salomon によって研究された。その作品はとても微妙で美しく、美術的質からして、ヴォイニッチ手稿とは全く異なる。デザインはとても緻密であり、多くの同心円を円弧と線が二分し、帯は小さな数字と文字で詰まっている。たくさんの注意深く描かれた人物はよく設計された世界、そしてその他の地図であり、その内側やその外側にはさらに小さな人間が描かれている。

地図と構造的な計画は Opicinus 著作の主要な特徴であり、聖書の記号として動物が四つの福音書や星座記号を表している。ある絵は彼の生まれてから1335年または1336年(彼がこの絵を描いた年)までの自伝であり、すべてが一つのページに詰め込まれている。それらはラテン語の小さな丁寧な文字でびっちりかきこまれていて、主に Opicinus 自身(彼の感情、罪深さ、無価値、出来事等)のことであり、宗教的象徴主義や聖書、教父著作の引用といった記号的方法で表されている。実際たった一つのヴォイニッチ手稿との類似点はその百科辞典的性質であり、たくさんの異なる要素を記号的に構造・意味上のユニットで結びつけていることだ。Opicinus の著作は外見やスタイルといった多くの点で我々の手稿と異なっている。Opicinus は訓練された美術家・職人であり、彼の土地パヴィアで早い時期に多くの敬虔な宗教小冊子のように、美しい構造を持った絵が描かれた本を製作した。

St. Hildegarde de Bingen (A.D. 1098-1179) 聖ヒルデガルドはドイツの女子修道院長であり、予言と神秘的ヴィジョンを見る力を与えられていた。彼女は病気の原因と治療法についての書物と同じく、これらヴィジョンに関する記述と絵付きの本をいくつか書いている。一見したところではこれらは我々の手稿とかなりよく似ている。それらは比較的「地方的」

かつ「粗野」であり、優美さや Opicinus のプロ的な絵の巧さはない。ヒルデガルドの絵のいくつかはヴォイニッチ手稿と同じように記号的構成を持っている。内容は例えば動物の頭やキリスト、マリアの姿といったようになり違っている。いくつかの絵はヴォイニッチ手稿と類似した光の列、雲、炎が描かれている。

私が見たヒルデガルドの作品の絵の中には全く文章やラベル付けがなされていない。意味は本の中のどこか他の場所で解説されている。それらそこで説明される象徴はすべて聖書やキリスト教に関するものである。(太陽のような炎の玉はキリストの燃える愛であり、その上の3つの小さな星は三位一体、蒸気を吹き出す頭は福音を説いたり、悪魔を働かせる言葉を使う人々である。) デザインはとても均質で、抽象的なものは多くのヴォイニッチの絵に似ていて、小さな細胞や円の周りからのびる放射状の線は似たような配列である。おもしろいことはヴォイニッチ手稿が「丸く太った」人間や「ゴシック」スタイルの欠如という専門家の指摘にも関わらず、ヒルデガルドの12世紀の人間の姿が、よく肥え、快活で丸いことだ。(ヒルデガルド作品に関する優れた議論と、多くの絵の複製は Singer 1975, pp. 1-58 を見よ。)

以上全ての一般的な類似を見てきたが、私はこれらの絵とヴォイニッチ手稿の本当に密接した類似を見ることはできない。Opicinus やヒルデガルド作品を比較したときの主な重要点は、その独特な百科辞典的、象徴的作品が中世においては決して珍しいものではないと示されたことだ。Petersen が参照した占星術マニユスクリプト(Vatican 1906)もヴォイニッチ手稿に本当は似ていない。このたくさんの絵と他の似たマニユスクリプト(in Saxl 1915 and 1927)との詳しい調査では宇宙・占星図の構造は全く似ていなかったことを示した。ほとんどの中世占星図の特徴は人物図、動物図、そして他のはっきりした図が要素となっていて、ヴォイニッチ手稿の中の絵ではそれらの抽象的スタイルは目立ったものではない。

3.3 絵を内容で分類する

読者を退屈させる危険を冒しながらも、次の段落では絵の外見の詳細について取り組む。様々な理由からこれらのページを複製して本に載せることはできない。したがって、手稿の photocopy を手に入れることのできない読者にはそれら内容を言葉で伝えられるであろう。私が調べてきた資料のほとんどはこれらの図に注目していないし、偶然研究者が彼の理論に関係するページの詳細について触れている場合を除き、内容については全く議論していない。そこで読者には私のこれから幾分長く続く個々の絵についての議論を我慢して頂いて、私はそれら特定の内容と詳細について取り組む。図4はそれらの概略と主題によるページのカテゴリである。

3.3.1 草本植物の絵

初めに気づくことは、植物全体の絵が数多く描かれ、それには普通1段落、もしくはそれ以上の段落の文章が続き、この謎を解く望みを与えてくれる可能性が最もある。他の研

究者達は精力的にそれを既知の植物やそれ以外の植物画と関連づけることに努力してきた。結果はとても失望的かつ曖昧なものとなった。Elizebeth Friedman は最も価値ある同定を次のように要約する。「よく知られたアメリカの植物学者 Hugh O'Neill 博士は 2 種のアメリカ原産の植物の絵を同定したと信じたが、他にアメリカ原産の植物を描いたものだと確信した学者はいなかった。しかし偉大なオランダの植物学者 Holm は 16 種を明らかにヨーロッパの種だと同定した。残りは混合である。言い換えれば根はある植物から、茎はまた違う植物から、葉と花も別のものからといった具合である。少数の根と花の構造は想像である。」(1962) 不幸にも Friedman 夫人の新聞に載った記事以来、誰も Holm の価値ある発見を参照、引用した者はいない。私は今のところ、この情報についての資料を見つけることはできないでいる。Petersen は Holm の詳細な同定リストをいくつかの資料から得て、それらを引き替えて記載した。Friedman 夫人の説得力ある Holm の発見についての強い言及にも関わらず、Tiltman (1968, 1975)のような後の作家たちは彼のものを O'Neill より決定的であるとは考えていない。

多くの学者が O'Neill の f93r に描かれたヒマワリの劇的同定について疑問視している。(1944, p. 126) そして f100r の「トウガラシ」やコショウの同定についても疑問を持つのはもっともである。それは小さく、素描され「薬草つぼ」の隣の列にあり、それらはおそらく植物を混ぜ合わせるための処方と考えられる。(これら「薬草」の絵についての議論はセクション 3.3.2 以降を見よ。) O'Neill によってコショウの実と考えられた物はすぐに、手稿の作者が習慣に従い奇妙で、角形に描いた葉であることが判明した。この印象はそれが赤ではなく、緑に色づけされていることから支持される。その「コショウ」の同定は、Brumbaugh の解説に際しても利用された。彼は「コショウ」が緑色なのは意図的な隠匿であると考へた。(1974, p. 546) 多くの研究者達が植物の絵の同定を試みた。彼らがおそらく最も手稿中の絵を調べた人々であろう。それら植物同定の編集されたリストは、Petersen が手で書き写したもののなかであって、それらは Voynich 夫妻、O'Neill、Holm によるものである。(Petersen 1966)

この点に関し、私は草本ページに見られる多くの植物構造の特異性に関して、余談を続けたいと思う。その価値はわからないけれども、他の人々が絵をさらに詳しく調査し結論に到達することを願って、私の主観的、個人的な意見を述べたいと思う。植物体の多くは角張ったブロック体で、固まりになって、切られ、平面の形の変化がはっきりしている輪郭に囲まれた台状構造をしている。私にはこの特徴的な形が、プラスチックを成型させて作られた構造のように見えてくる。例えば f44v, f45r, f45v, f37v, f27v, f23r, f9r, f11r, f13r, f16v の根冠を見よ。この他にも列挙できないほどたくさんある。それらは出現点のワッシャー(washer)やガスケット(gasket)のようなリングによってしばしば囲まれ、茎から突き出た筒や平らな逆円錐、円盤状の頂上からなる一つ、もしくはそれ以上の円状の台によってもたらされているようだ。(これら特徴的な絵の詳細については図 5-7 を見よ。)

類似する構造上の特徴は f15r, f88r, f100r, f102v2 (それらのいくつかは「草本」図というよりむしろ「薬草」である。)の中の葉についても見ることができる。それらは同じく台-ガスケット様の膨張で終わる。f3v, f22v, f45r, f45v, f54v, f65r や他のページの根の構造は筒が根の繊維と結ばれ、筒を組み合わせたようなブロック配置が見られる。f53r ではそれらは木のブロックを並べた長方形のようにも見える。(図 5-7 にこれらの形の例がある。)

私には背景としてあるこの広く使われる様式の重要性がわからない。しかし絵を解釈し、それらの起源を追うことは重要であると理解している。同様の「パイプ」、 「筒」、そして不思議なページの特徴である人物の中に見られる雲状の構造といった習慣的に使われる様式 (f75r やそれ以降) は、セクション 3.3.5 以降でさらに議論する。

ブロックのような大雑把に描かれた植物の絵は他の、初期の資料を筆写を重ねて伝わってきた写本で見られる。これは例えば Dioscorides の絵に基づいた初期のアングロサクソンの医学マニュスクリプトいくつかに見られる。Arnaldus of Villanova 著作とされる『Tractatus de Virtutibus Herbarum』では初期の植物画を見ることができ、ヴォイニッチ手稿のページと同じように、太くて短い植物の絵が見られる。(Tiltman 1968 や図 6 を参照。) もしこのことが、ヴォイニッチの植物画が初期の資料とかけ離れてしまった写しであったのなら、私たちはページやそれらの構造に一般的構成をなお見つけることができるはずである。(茎の数、果実や花、葉や根の大まかな形、等々。) 特に Tiltman が指摘したように、(1968, p. 11)初期の植物を描くのに、異なった絵を組み合わせてというのはかなり少なく、同じ絵の組み合わせが何世紀にも渡って筆写を繰り返されてきたのが普通である。

私はむしろこの無骨な特徴は筆記人の個人の特徴であり、何か象徴的な意味があったのだと思う。それは大胆に、そして妥協なしに仕上げられて、下手さ、不器用さが原因による意図に反した結果だとは思えない。筆記人は実際に彼が描いたような植物体を意図した。私はこれらの絵を描いた筆記人が自然物を機械的、構造的に描くことに興味を持ち、慣れていたのではないかと考える。

ここでもう一点、動物と人間の顔がいくつかの植物の根に描かれているものがある。動物については f25v, f49r, 顔については f33r, f55v, f89r1 を参照。いくつかの植物では首があるところに植物の茎があり、動物や人間の体が現れる。これらについては f99v, f90v1, f89v1 (ライオン?), f46v (鳥が羽を広げている。ワシ?) を参照。根のいくつかは動物の足に似ていて、それらは爪や指先もある。(例えば f89r1)これらには初期の植物を描くときの慣例に似ている。もし解毒剤として、もしくは毒虫から咬まれた場合の防御としての植物だった場合、しばしばその動物は植物の下か近くに示され、その関係を強調して覚える手段となる。食事をしていたり、ぶら下がっていたり、植物に穴をあけさせそうな動物の有害な効果といった多くの場合を除けば、ヴォイニッチ手稿の例も同じような目的だったのかもしれない。おそらく目的は園芸であり、しばしば植物と一緒にいて、それを食べる虫や、鳥を意味している。または(私の考えでは)最もありそうなことだが、意味は錬金術書に共通するように純粹に象徴的なものである。(例えば動物の形。図 8, 9 を見よ。)

植物の根に顔が描かれていたり(f33r, f89r1)、目や角、鼻が他の植物体に描かれているものは説明困難である。Tiltman (1968)は初期草本を研究している人々にとっても有名な「カオジロガン」とマンドレークの例を引用した。いくつかの植物は擬人化され、また植物と動物の生活が一つの形に混ぜ合わされている。それらを含んでいるのがヴォイニッチ手稿である。マンドレークのように、植物は動物を生み育てたり、動物や人間の特徴を持っていると考えられた。いずれにせよ私は奇妙な 2 点について 植物体の奇妙な彫刻のようなモデルと、そして植物体の中の動物や人間の存在 これらは植物・錬金術稿本から似た例を見つけ比較し、分類的研究をすべきである。(興味深い 16 世紀錬金術稿本との比較はセ

クション 8.8 以降に記載する予定である。)

他の多くの植物ページにおける奇妙な構造的特徴は、厳格かつ構造的な植物の茎と葉の対称的配置である。例えば茎は f5r, f22r, f35v, f40r, f90r2 では根冠から生じる。f2r, f11r, f11v, f14r, f14v, f22v, f45v (そして他の) 全ての根の配置は、お互いに交差し、絡まりこぶのようになった奇妙に内曲した形である。(図 5, 7 を見よ。) 例えば葉は f3r, f13v, f22v, f29r, f41r 等のように茎の上に周期的な対称パターンで配置される。それらはとても人為的、機械的であり、他の人工的構造と調和している。これらはこの奇妙な f90v1 の「プラスチックモデル」植物の「花」や「果実」でも見られる。それは例えば金属のスパイクを堅く固定したように見える。f3v, f6r, f56v, f90r2, f96r の花は排気管のフードのようにも見える。(図 8 を見よ。)(繰り返すが、錬金術マニユスクリプトとの著しい類似はセクション 8.8 で議論する。)

3.3.2 薬草の絵

手稿中のこのセクションページでは、小さく植物体やその部分のある構造(根や葉)が強調して描かれ、列になっている。それらはすでに他のページで描かれた植物や、筆記者・その同僚がすでに十分知っている植物を記憶のため、または参照のため略記した記号のようである。いくらかの研究者がこれらのスケッチと植物の絵の関連を決定しようと試みたが、しかし成功はしなかった。

これらページの中で他の目立った特徴としては、薬草壺、もしくは薬の容器に似た物品が存在することだ。いくつかのページ(例えば f99r, f102v2)の壺はヴォイニッチの文字で単語、または句が「ラベル」されている。しかし不幸にも私の持つフォトコピーでは、壺部分には顔料が塗られており、多くの場合何と書かれているのか不明瞭である。そのほかの場合「ラベル」は近くの壺や、それが表す「処方」に関連があると思われる。似た「ラベル」が小さく、スケッチされた植物列のところにも現れる。いくつかの場合、それぞれの「ラベル」が隣り合った植物のどれに当たるのかを判断するのは難しい。絵の列の間には、文章が一段落、もしくは数段落挟まれる。普通、壺は列の左端に置かれ、列の植物は壺に表される薬を調合するために使われるのは間違いないと思われる。壺のデザインはとても装飾的、華やかで、幾何学的に飾られた円柱は節になっている。その縁は凝った装飾がされ、脚は曲線を描き、頂部装飾や取っ手は精巧である。(失礼ながら、現代で似ているものといえば、車のボンネットの真ん中に付いている飾りである。)これについては図 15 を見よ。その飾りと「パイプセクション」構造は占星ページで人が「空き缶」から出てくるものに似ている。(セクション 3.3.3 以降を見よ。)そして飾られた台やパイプ構造は人間の絵で特徴のあるページのものに似ている。(セクション 3.3.5 を見よ。)

3.3.3 占星及び天体図

これらの絵の中で顕著なのは、円形の連続するカレンダーであり、それは明らかに一年の 12 ヶ月と関連していて、それぞれの中心には 12 星座のシンボルが描かれている。奇妙ではあるが判読できる月の名前は、ヴォイニッチの文字と明らかに異なり、後に書き加

えられたものであると、ほとんどの研究者達の間で意見は一致している。図 10 にこれら月の名前の詳細を載せた。1月と2月（水瓶座と山羊座）は Voynich が手稿を発見する以前に失われていた。研究者は初めこの月や星座の記号を通して何らかの解読の望みを得ようとしたが、それはすぐ失望へと変わった。なぜならその中の図は既存の占星図や天球図と全く関連が見られなかったからだ。

ほとんどの図ではおよそ 30 人の女性が周辺に 1, 2 もしくは 3 列に描かれ、何人かは立ったまま、他は垂直、もしくは横になった缶やチューブの中に入っている。その缶やチューブには紋章が装飾されている場合もある。何人かは裸であるが、その他は部分的に、もしくは完全に着衣を身につけている。着衣にはベール、帽子、王冠が描かれ、衣装も入念に仕上げられたものである。これらからその地域、時代を簡単に探ることができるはずだ。Petersen が彼のハンドトランスクリプション上に記載しているように、人物の何人かは女性というより男性である可能性が高い。「缶」に描かれているデザインは明らかに見分けが付くように故意に描かれたものであり、それらを注意深く研究することで、人物の特定、同じ人物が他の図に描かれているのを特定する手がかりを与えてくれるだろう。図 11 はそれぞれの図において異なった列に何人の人間が描かれているのかを分析したものである。これらの配置は中世の慣習にとっては重要な日の分類である。例えば「Egyptian days」や「critical days」。

4月、5月は12星座では牡羊、牡牛であり、残りの月と比べて2つの円形メダルを持ち、15人ずつの人物が描かれていることで目立っている。(f70v1, f71r, f71v, f72r1) そして2つの同じ月の図がお互いを補完し合っており、これは雄牛や雄羊が一方は白、もう一方は黒く塗られていることから支持される。特に記しておく興味深いことは、どちらの場合もその動物が餌を食べていることだ。牡羊は明らかに美味しそうに低木の葉を食べているし、牡牛は馬草桶や餌箱のようなものに明らかに満足し、それは自分の好きな場所に置かれている。私の意見では、これらの詳細からはその内容が、魔術・神秘主義的なものよりむしろ園芸、医学、農学であることを支持する。(私の印象にすぎないのだけれども。) いずれにしても、私はその意味がいつの日か何であることが分かっても、それが筆記者の主題に対する実用的、現実的アプローチであることを意味する喜ばしい発見をした。

いくらかの太陽、月、星といった他の絵は暫定的に天体と分類されるものの主な特徴である。続く段落で私は主なこれらめいめいの構成要素の概略を述べようと思う。この書の中ではそれらほとんどを掲載することができないからだ。図 12 は次のセクションで議論する「宇宙」図に付属しているこれらの図の主要要素を要約したものだ。

f67r1 には中央に 12 個の星に囲まれた顔があり、たぶん月を表している。光線の片側は星で飾られ、もう片側は顔料が一樣に塗られている。対になった断片の続きにはそれぞれ光線が含まれ、1 つまたは 2 つの星の代わりにヴォイニッチ文字の単語、句が交替で現れる。3 つのテキストからなる同心円は全て、始まりの場所を示す飾られた印に囲まれている。f67v1 は幾分似た感じであり、17 の 2 重光線の中心には大きくほほえんだ太陽の顔があり、テキストの句は 1 ~ 4 の小さな星のグループと交替する。一つの最外殻の円形テキストは飾られた分離帯が散りばめられている。

f67r2 は大きく 12 に分けられる複雑な円形デザインである。その中心は 8 語の単語の環に囲まれた 8 つの星である。ダッシュ記号(-)は開始点を表しているのかもしれない。12

個の月の顔は全て右を向き、中心領域の外にある隣の環を覆っている。それぞれはテキストに連なっている。12個のパイの形をした断片は外側、一つが12個の月の顔のそれぞれまで拡大する。このうち7つは追加の単語を持ち、そして全てに文章段落が含まれる。それぞれの断片には句が含まれ、その最末端には濃く、重々しく書かれている。段落は3つの線からなり、(そのうち真ん中のものは濃いインクである。)それらは円形デザインの下に見える。

f68r1は大ざっぱに円形の星の領域がある。それぞれの星の下にはヴォイニッチ文字の単語、句が書かれている。一番上には円形のテキストに囲まれた太陽の顔の大きな円形のメダルがある。下には同じ様にテキストに囲まれた、整った円形の月の顔がある。少なくともラベル付きの星は28個ある。(フォトコピーでは、そのうちいくつかは途切れて見えないかもしれない。)いくつかの星は他のものと比べて大きかったり、色が異なったりしているが、この違いは筆記者にとって重要な考えがあるのかもしれない。f68r2はこれに関連し、その相手となる図であり、再び円形の星の領域がある。しかし今回は、中心の集合の中のラベルされた星は25個しかない。この図では太陽の顔が一番下、月の顔は上の方にある。この2つのページにおける太陽と月の周りの環状のテキストや個々の星に付けられたラベルの相参照の試みは今のところ実ってはいない。f68v1は中心に顔があり、それはたぶん太陽であり、王冠かヘッドバンドを付け、炎か光線に覆われている。16本の大きな2重光線はその中心の顔から出て、片側は暗く、もう片方は星で埋まっている。これはf67r1の形と似ていて、多分太陽-月の組み合わせがこの手稿中で宇宙、錬金術の基本的テーマ形成に関係しているのだろう。この光線を含む32の分離断片の連続はテキスト句と小さい星の領域の交替を含む。全てを覆う2つの外側のテキストの環は垂直で示される開始点を持つ。

f68v2は8点の太陽のような中心が8つの花弁の形をした光線に囲まれている。この向こう側には4つの中心から離れてゆくテキストに分断された4つの断片がある。さらに中心「花弁」点から出現する中心から離れる4本のテキストによって8つに分割される。小さな星の4つの領域がこの断片の中に散りばめられる。垂直の線で示される開始点から始まる一つのテキスト環は全体を覆う。

最後にf68r3は4つの小さな星の領域と、f68v2とよく似たさらに補助のテキストの線によって分離される中心から離れるテキストの線が交互に現れる8つの主なパイの形をした放射断片の形式の中に月の顔が現れる。外側を覆っている一つのテキストの環には開始点の印を見つけることはできない。

これら図にはいくらかの系統的内容が含まれていることは明らかである。昼と夜の長さの比、異なる種類の星によって決定される季節や行事、太陽と月が気性、元素、季節、年齢、風、方向に及ぼす影響等に関係しているかもしれない。(中世の宇宙論と医学では、いくつかの実体を名付ける際には「4つ」に区別されていた。)f68r3の一つの部分には7つの星の集団があり、(他の研究者も同じことを記している。)それはプレアデス星団を表していると考えられる。これら多数の構造的内容を注意深く、そして決定的分析によって中世の教義の研究と関連させるのならばきっと、我々に何らかの図の意味を解釈させるものが見つかるはずだ。

3.3.4 宇宙そして気象図

放射断片、パイプ状、小室状の要素、雲と蒸気の固まり、そして中心が星や太陽といったメダルを示す円形を基礎に作られた図がまだまだたくさん存在する。単語の文章または一文字がそれらの中、たくさんの小室、光線の脇に書かれている。同心円の帯はそれらの周りにあり、中には開始点が垂直の線や装飾によって描かれている場合もある。図 12 は天体図の中のたくさんの主な要素を調査したものである。関連のあるたくさんの物品との相互関係を明らかにする系統的な試みが、現在知られている中世の宇宙体系と興味ある平行関係を明らかにするかもしれない。多分ピタゴラス派の教義が起源になっているのだが、中世・ルネサンス哲学では数字それ自体が魔術的な重要性を持っていた。中世の魔術書にはしばしば 2, 3, 4 ~ 11 もしくは 12 までに配置された数字のようなものを含む表があり、それら表には具体的類似点が見られる。ピタゴラス派哲学の宗教的、魔術的数秘術では 4, 7, 12 が特に重要視された。図 14 は Agrippa (1970) の表から要素を抜き出したものである。図 35 はカバラの重要な要素である。(セクション 8.7 を見よ。)そして図 34 はいくつかの類似が見られるガレノス医学からの要素表である。

とても奇妙で、(私の目には)とても魅力的に映る図が f85-f86r2 (複数に折り畳まれた大きなページの裏側) にあり、それには中心に太陽の顔があり、大きく 4 つの領域に分けられている。垂直なテキストの線は中心の太陽の周りにある開始点を示している。これは交互に扇状の欄干に囲まれており、その上には 4 人いることがわかると思う。これらははっきりと幼児、男の子、大人、そして老人が杖をついて前屈みになっている様子を示している。それぞれの人物の頭の上にはたくさんの段落の文章がある。4 つの領域はテキストから作られる環を含む最外殻の環を越えて吹き出す蒸気によって分割される。そして吹き出し点の左、断片の中へ戻る。この図は、図 34 に示すように 4 つの季節、人間の年齢の 4 段階、4 つの気質等に関係していると思われる。これらの関係はこの 4 つの領域中のテキストの解釈に繋がるかもしれない。

「4 つの年代」の図は、アングロサクソン系中世写本を高度に暗示するものである。(Caius College, Cambridge, MS. 428, fo. 50; Grattan 1952, p. 94) そのアングロサクソンの図は、中心の円盤に向かって落ちてくるものを 4 人の人間がポットに受け止め、それらが領域を 4 つに分けている。小さな中心円は、分かりにくいイラストの中に書かれた乱雑で判読できないラテン語が作るテキストの環の中で、もう一人の人間がこれら流失物を受け止めていることを示している。最外殻のテキストからできる環は他の苦心して書かれたラテン語の文章全て覆っている。「*Quattuor humores bisbina partes liquores effundunt teneri per corpora sic michrochosmi.*」その 4 つの領域には両側にさらにラテン語の単語が書かれ、いくつかは読めないが、それらは気質、性質、元素について書かれてあると思われる。(「*colera rubia*」, 「*calidus*」, 「*sicca*」, 「*sanguis*」, 「*calidus*」, 「*humidus*」, 「*??*」, 「*frigida*」, 「*humida*」, 「*terra*」, 「*frigida*」, 「*sicca*」)。この種の図は中世占星術・医学写本にはとてもよく見られるもので、人間の「小宇宙」、「小世界」といった大世界や大宇宙の要素・関係を反映・要約する縮図と考えられている中心教義について言っているものである。通常それらの図は人間が他の単語や絵と結合したラインで結ばれ、星や天候がそれらに作用する力を示

している。(cf Saxl 1915 and 1927; Bober 1948)

もう一つの注目すべき図は f67v2 にあるもので、他のどんな写本とも似ていない比類なさを誇る。それは大きく 4 つに分割されていることから判断すると、季節を表していて、気象的テーマであることを示唆する。4 つの蒸気の煙は、半分隠れた(もしくは生まれようと、または支えている)2 つの太陽と 2 つの月の四隅から現れる。(Newbold はこれらの特徴を「日食」と考えた。)点線は上方左隅の太陽から中心へ向けて伸び、これは年表か物語の開始点を示しているのだろう。内側が四角で螺旋状の光線を放つ太陽が中心にある。4 つの太陽や月の間から、さらに内側へ蒸気の噴出があり、そしてテキストの線はそれらに続く帯に沿って書かれる。中でも最も奇妙なものは、その四隅には円形の顔のような風船の形をした物体が、単純な("X"や"4"といった)幾何学模様を作っている筒や帯を担っていることだ。これらの形のうち一つはページの左下にあり、頭がUの様に開いた4つの風船の顔を持ち、青、緑、赤に塗られた円の3つの断片が重なっている。下で見るようにこの3つに分かれた物体は手稿中の至る所で見られ、我々が住んでいる世界を表す普通の地図(T-map)を表しているのだろう。これら幾何学図形の唯一の説明は、それらが惑星の結合、もしくは魔術的な「星」が4つの季節や、方向、風、人間の歳もしくはこの謎の作品中の説明の付かない教義の他の何か重大な物事と関係しているとしか説明せざるを得ない。円の連なりや点(顔はない)が線状に並んだ幾何学模様は *Picatrix* (Ritter and Plessner 1962)の中で見ることができ、その目的は「星の絵」または星座を魔術の文字として用いている。(セクション 8.4 を見よ。)それと幾分似た点や円の連なりが線状に並んだものは魔術写本中に魔術アルファベットとしてよく見ることができる。(セクション 8.8, 9.4 そして図 41, 42 を見よ。)

もう一つおもしろい図が f57v にあり、5 つのテキストからできている同心円が、左上に消えかかった共通の開始点を持つ。中心には4人の人間がいて、胴から上が描かれている。それぞれの人物の間を4つのテキストの線が中心の扇形のメダルから外へ向かって伸び、そしてさらに4つのテキストの線が人間の間配置され、それを人間が指さしたり、握ったり、持っているように見える。一組4本からなる二組8本の線のテキストの構造は手稿中にたくさん出現する他の図に出てくるものと似ている。そしてこの図には17の謎の記号の繰り返し4回、2番目のテキスト環の周りに現れる。テキスト中どこにおいても周期的に繰り返される表はとても珍しいケースであり、研究者から「解読の鍵」であるかもしれないと注目されやすい。(図 24 を見よ。)

f68v3 には Newbold が「渦巻星雲」だと考えた絵が描かれている。中心の円は水平方向を通る線によって分割されている。上半分はさらに上から中心まで線によって分割される。この図は f85-86v3 の中心に書かれている幾何学図に似ている。(以下で見る。)上半分には単語や句が、そして下の半円には長い段落が書かれている。この図を取り囲んでいるテキストには開始点が示されている。4つの主要な領域は緩やかに曲がった文字の帯によって分割されている。これらの中には水や波のような輪郭があり、同じ渦巻の中の星の曲線の列によって領域は決められている。それぞれの波打つ輪郭の一番上の中心から、4つの渦巻の文字の帯は外へ伸び、私たちはしばしば他の図の中でも見られる同じ2組の4つの要素の図を見つけた。全てを包む最外殻の環ははっきりと飾られた印から始まる。この図、つまり2つの4構造はおそらく季節、年齢、気質といったものを示しているのだろう。そ

してそれはまた地理的な意味も持っていて、あの記号は中世の図象学のあらゆるところで見ることができ、この世界の地図を象徴している。

f70r1 には星が 6 個、それぞれの点の間に 6 単語書かれてある。それはテキストの環が交互に現れる奇妙な 58 個の細胞状の物体、中は空^{から}か点で埋められている、からなる環に囲まれている。内円に囲われた水性の領域には 9 つの波、または泡の吹き出しがある。9 つのテキストの帯はこれら波の裂け目から内から外に向かって放射状に伸びる。3 つのテキストの同心円環が全体を覆っている。この絵が健康に対する影響として、湿気のような水の特性、そして数字の 6, 9, 58 に焦点を当てていること以外に、私たちに理解できることは少ない。

f69r にもまた中心に 6 個星がある。5 つの一文字と、1 つの連字が星の間にはある。中心のメダルの周りをテキストの環が覆っている。外には 45 個の筒状の伸ばされた光線が密接に接近し、太い線がそれらを不規則に 1, 2, 3 本の線に分割している。テキストの線は放射状にこれらの 21 本の線に沿って書かれ、そして全てを覆うテキストの環がある。f69v は幾分似ていて、中心には 8 個の星があり、それらの間に小さな星がある。28 本の筒状のものが中心から放射状に広がり、そのそれぞれの出口からテキストの単語や句が出る。3 つのテキストの環が外の領域を走る。

f85-86v4 では中心に小さな月の顔がある。その中心の周りには 5 つの泡でできた小室の同心円環、波状のものがある。4 人の頭、腕、肩は、海から現れるように真ん中の環から現れている。腕は上げられ、手には何かを持っている。一つは十字架のようだ。4 つのテキストからなる線が全てを覆い、その開始点の左にはっきりと示される。

f85-86v3 にはとても奇妙な 4 つの複雑な逆円錐構造の絵が四隅に描かれ、それらは中心に向かって内側へ伸びている。左上の円錐様のものはぶどうの房、雲または細胞のように見える。その先からは中心に向かい、何かが噴出している。その房の側からは人の頭と手が現れる。左上には鱗、貝殻、または波からできた太いチューブ様の構造があり、斜めに交差している。そこからは蒸気の噴出、もしくは中心に向かって風が吹いていて、その中には鳥が元よく飛んでいる。その中の下にある構造はさらに伸び、縦の繊維の層から作られていて、小室の層に交差している。一つは前方へ雪か雨の粒を多量に噴出し、ページの中心へも飛ぶ。人間は半分現れ、その噴出の片側を凝視しているようであり、彼も右手を伸ばして小さな粒を投げ飛ばしている。残った円錐は右下にあり、それは蒸気を噴出していないが、代わりに鳥がその頂点に巣を作っているようだ。茎の上の 3 つの枝状構造に座っている鳥に曲げられる。4 つのテキストの段落はページの大きな蒸気の脇にあり、5 つ目の段落は中心より上にある。

おそらく 4 つの噴出はこの地球を覆う 4 つの風を表していると考えられる。そしてこの章の他のいくつかの図は季節や天気に関係しているのかもしれない。巣にいるものや、そのほかの鳥は多分渡り鳥であり、鳥に関してはこの判断基準で説明できるだろう。なぐり書きされ、3 つの小区画に分割された円形の図あは、f68v3 と似ていて、このページでは中心は空^{から}である。その隣にはなぐり書きが書かれていて、でたらめに書かれたアラビア語に似ている。このなぐり書きは f66v の左下に書かれたものとよく似ていて、雑に書かれた幾何学的図と関連しているように思われる。(これらの乱雑な句については図 21 に詳細がある。)

最後に f70r2 では中心に顔があり、おそらくそれは太陽である。それは花卉様の広がりを持つ 8 つの大きな断片に囲まれている。一つの小さなテキストの環が中心を囲み、そしてさらに 4 つのテキストの線が全体を囲んでいる。最外殻の線は 2 つの組になっている。外側の組は二重の縦線で表される共通の開始点を持つ。一方内側の組は開始点は異なっていて、一本の縦線でそれぞれ示される。文章の段落はページの右上にある記号に結合している。

以上長々と述べてきたが、これら興味深い天体図についての議論はまだまだ完全ではなく、それらに関する注意深く、そして系統的な調査を求めることに同意する研究者にとって、それらに関する入手可能な多量の情報を適切に評価できるものではない。ほとんどの研究者がヴォイニッチ手稿中の絵をあまりに容易に推測してきたが、私はそれがこの注目を断定するにはあまりに異様で、途方もないものであると信じている。誰かが膨大な中世マニュスクリプト、またはこれらのコピーを研究することが待たれている。絵の図象学的な要素の完全なる調査が行われれば、おそらく何らかの有用な類似関係が見つかり、それはテキストを理解するのにも役に立つであろう。

3.3.5 人間を特徴とした図

f75r,v そして f76v ~ f84v までに描かれたものは、ヴォイニッチ手稿の中で私たちに最も謎めいた、かつ奇異なものを提示している。それらは女性の列であり、ほとんどが裸の女性。(しばしば他の研究者がいたずらっぽく記載するように) 彼女らはとても太っている。彼女らのほとんどがお腹が出て、尻も膨れている。現代アメリカ人の目から判断する限り、とても官能的なものとはいえない。そこから受ける印象はむしろ、土地の肥沃さ、物質的な豊かさ、子育てといった何か現実的な側面である。彼女らの多くは長い髪を持ち、冠か上品なベールを身につけるも、衣服は全く着けていない。彼女らのポーズは生き生きとして、表情豊かで様々である。

女性は座ったり、立ったり、横になったり、またはお風呂、チューブ、筒、石炭バケツ、演壇、莢、台の中や上といったように様々に配置されている。これらの物体は以前植物と結合しているものを述べたときと同様に、人工的な固まりとして描かれている。事実これらのうちのいくつかは果実、莢、根や茎といった構造にとってもよく似ている。例えば f83v にある 2 つの顕著な球体は導火線のついた機雷や爆弾といったものによく似ている。私にはそれらが f90r1 にある果実と対になったものだと思う。f79v にある 3 つの筒状構造が大きな中心チューブに囲まれたものは、f90r1 に現れる植物の根冠に似ている。同様、f77v の 3 分割構造は 3 つの巢や、演壇状の盛り上がりパイプと結合し、これら 3 つのパイプ状構造が中心の膨らみから吊され、3 つの茎を持った植物が地下根やストロンで結合したような植物の根冠構造に似ていると思う。(図 15 に例示する。)

女性の幾人かはその手に紡錘形の物体を握っているが、それらは果実もしくは莢と考えられる。筒状構造の物体が女性を取り巻いている。(そしてそれらの内側や外側からは、不思議な蒸気や液体が伝わる。) それらは植物の根や茎の構造を良く図式している。またこれら筒の上には、たくさんの孔から漏れた雲状の構造や、煙、蒸気が見え、そして液体の入った浴槽には女性の一群がその中で座ったり立ったりしている。気質、エキス、水分、

樹液等はこれら絵の中で重要な教義を構成しているらしい。いくつかのページでは（例えば f75r の左から下方向へ向かう人の列。f82v の右上、そしてそれより二つ下、中心。）アーチ状の構造が橋を架けるようになっている。これらはまさに虹のように見えるが、もしオリジナルのカラーで見なければ、ほとんどのアーチが単なる 4, 5 つからなる同心円の黒いバンドにしか見えないうらう。（錬金術画の中にもたくさんの穴のあいた筒から蒸気が噴き出しているのを見ることができ、それらはこれらページにあるものと似ている。それらについてはセクション 8.8 を見よ。）

もう一つこのセクションで記載すべき絵の詳細は、片方が長い小さな十字架である。（例えば、f75r の一番上では分岐する光線の焦点となっている。f75v の右側、光線や雲のある領域。f78r の房状、雲状構造の左上の焦点。そして f79v の人物の上にある光線のひだのついた覆い焦点。その人物もその手に十字架を持つ。）これらの印はとても小さく、目立たないが、しかし多くの場合光線の焦点や、源となっていて、光線は女性の上へ降ろされる。明白な説明の一つは神の光、そして女性によって制御され表される多産、滋養、人間の徳を促進することに影響している。十字は明らかにキリスト教教義の中のものであり、手稿に書かれていることはこれを説明している。最も私の知る限り、他の研究者でこれについて言及したものはないが。

これら奇妙な絵を私たちはどう解釈すればよいのか。私がすぐに思いつく可能性としては、ガレノス派医術との関連であり、その「消化」の 4 段階と、それぞれの段階における様々な副産物が挙げられる。滋養や、植物の治療に対する特性、植物の処方、薬草セクションのページのそれである。もう一つの可能性としては治療としての入浴。これは中世の薬の特徴と一致し、つまり温と湿であり、それら自体に治癒力が備わっている。この繋がりでは Roger Bacon について記載することは興味深い。彼の医学著書 *De Retardatione Accidentium Senectutis* (Bacon, 1928a) の中では香油、熱の放出、そして貴重なアロエ、鹿の角、毒蛇の肉を勧めている。（この中世作品は初期の医術、ガレノスや、偽アリストテレス、たくさんのアラブの著書の単なる編集であり、これは後の医師達に盗作、利用されたが、ほとんどは Bacon のオリジナルではない。）

Brumbaugh (1973) はこれらの絵は、Roger Bacon が書いた「エリクシル」の処方に見せかけて描かれたと考えた。（Bacon の中世の著作には、*Epistola de Mirabili Potestate Artis et Naturae* とその他いくつか誤って彼のものと伝えられた作品、疑わしい錬金術の著作の断片が 16 世紀には良く知られていた。）Panofsky (1954, p. 1) は人間が「星霊」を表し、それが放射によって星から惑星へと伝わり、植物や他の生き物に影響を与えているのだと主張した。Singer は Tiltman へ宛てた 1957 年 11 月 12 日付けの手紙の中で、異なっているが、関連した主張をしている。「とても曖昧なものだが、私の感想では、身体の器官の中にある小さな裸の男女は、パラケルススや錬金術学校の「archaei」と何らかの関係があるのではないか。これは私が John Dee とボヘミアについて提案したものと一致する。」私が植物の器官と考えた女性が座るお風呂や台、そしてパイプを Singer はむしろ「人体の器官」と考えていたことを記しておく。図 13 はこの章での人間を男・女に分け数を分類したものである。

3.3.6 ロゼットのネットワーク、f85-86r3-4, v1-2

丸い円盤がきちんとした配列で並び、複数ページに及ぶ大きな断片が存在する。それについては今のところ研究者の言及はない。これはおそらくその複雑さと、とっぴさで、我々を驚かせ、その奇妙さは現在でも大いに煩わされる。研究者がこれらの図に注目してこなかった一番の原因は、手に入れることのできるこれらページの写真の質が悪いことだろう。写真は Petersen 神父のオリジナルから作られたものだが、それ自体が暗くそして擦り傷がかなり見られる。文字はほとんど判読できず、使いものにならない。

私が最近ベイニック図書館から手に入れたフォスタットコピーでは、この注目すべき絵の詳細まできれいに見ることができる。9つの環があるのだが、3つがそれぞれ3列ずつ持つ構造である。真ん中の列の中心は他のものより大きく、そして6つの星付き、球形の薬草壺がその中心にある。円盤の間には個室になった繊維状構造の覆いがあり、それがすぐ隣の環同士をつないでいる。一つの円盤には城があり、その側には小さな建物も見える。城は高く、凹凸のある壁に囲まれ、中心には塔がある。この中心には星が輪を作っていて、文字は螺旋状になっている。この近く、ページの一番はじの角にはあを含む小さな円があり、それぞれの断片の中にはヴォイニッチの文字が書かれている。ページの反対の角には Brumbaugh が「時計の顔(clock-face)」と呼ぶものがある。(これについては以下でさらに触れようと思う。)他の2隅には波打つ光線に囲まれた太陽の顔がある。いくつかの円盤は星で満たされた光線の花弁様の装飾がある。それらは以前述べた宇宙・占星セクションの特徴と同じである。多くの円盤にはその最外殻の周辺を囲むように、パイプの束、もしくは銃身構造がある。この複雑な記号の集合は、今までに考えられてきたよりも注目に値すべきものであり、手稿中の全ての図を統合し、基準となる意味を与えることになるのではないかと考えている。

これらの図の中にある Brumbaugh の「時計の顔」の同定についてここで言及する。構造の一番左端には小さな円が8つ(?)のローマ数字に似たものと、小さな文章の輪に取り囲まれている。この円の角には3角形の構造と、2本のそれを横切る線があり、その自由末端と、交差する場所には小さな球が連なっている。またこの円形の図は見かけ上時計の顔と似ていて、それは *Picatrix* の「星絵」やセクション 3.3.4 で言及した錬金術記号をも同時に表しているのではないか。2つの「手」は同じ長さにしようとした意図が私には見える。期待するように「時計の顔」の中心に手があるわけではないが、正3角形の図形が円の中心にある。3つの球の連なりを持つ全くよく似た3角形の図形が *Picatrix* の星の並びの中で見られ、それは錬金術師には砒素、石黄、カリウムの意味として使われていた。(Gessman 1922, Tables IV, XXXXIII, XXXXV)

3.3.7 欄外に描かれた小さな絵

人や動物、その他ほとんど判別できない物体がいくつかのページに描かれている。f66r では、すでに述べたように、一人の男が横たわり、病気が死んでいるように胃を掴んでいて、その周りには訳の分からない小さな物品が置かれている。最後のページ f116v の左上

には人、動物、そして不思議な形をしたものがいくつか描かれている。ほとんど文章だけが書かれたページ（f103以降）のそれら段落の左には星が描かれているが、その星には尾のような付いている。Tiltman（1975）が指摘するようにこれら段落では元々365個の星があって、一年の中でそれぞれの日にちを表す「星の表」になっているというもので、おそらく占星術的な予言、基準となっているのだろう。

3.4 全体として絵の集合を捉えたときの意味

Voynich は初めて手稿を見たときの印象を「絵は自然哲学の百科辞典的作品であると考えた。」と語っている。(1921, p.1) Elizebeth Friedman は「手稿の最大セクションである「植物」(125 ページ)はおそらく植物学者が描いたものであり、手稿は今で言うところの薬草類で構成されているのかもしれない。」と言う。(1962) Panofsky はまた明瞭に「手稿が解読される以前におそらく理解されるそれらが含んでいる内容として、第一に当時オカルトパワーは星から地球まで伝わると考えられていて、それら宇宙からの放射とこれら「精霊」が地球上にある物体、特に植物の医学的な特性に与える影響。第二に医学、そして魔術目的に使われた個々の植物の種類を記述したもの。第三に混ざり合って描写されたものは、個々の植物を様々に組み合わせで作られたからかもしれない。」と要約する。(1954, p.1) 彼が認めるように、彼はこのように様々な教義を一つの本にまとめた類似的な作品を見つけることはできない。(実際何巻にも及ぶ大規模で、似たトピックを扱う百科辞典的作品はたくさんあった。私たちがすぐに思いつくのは、Albertus Magnus であり、Roger Bacon と同時代の人物である。)

Petersen は手稿全体を通した意見として、同じように述べている。「手稿に描かれた絵は確かに文章が薬効のある植物と、中世における治療のための使い方が書かれていることを示している。f67-86 に描かれた絵は占星術的であり、中世の精気理論では生き物に生命を吹き込むことで作用すると考えられていた。(小さな裸の女性がこれを示している?)」分離した324の短い段落や文章(f103 ~ f116)が内容の目次や処方リストを含んではいないのであるか?(1953, p.1) Brumbaugh は手稿を「エリクシル」の論文であり、それを偽造した人物が皇帝ルドルフ II 世の興味を引くために、Roger Bacon の作品に似せたと考えていた。薬の百科事典、おそらく占星術の知識を様々な初期のマニュスクリプトから編集し、Brumbaugh が考えるには裸の女性が特徴のページは、「生物学的な再生産(生殖)、神学上の霊的な再生、またはエリクシルの応用」を扱っている。(1975, pp. 348-349)

手稿の異なるセクションの絵を調べているうちに、私はそれらが高度に象徴的、人工的、そして様式化された絵であり、その「言語」については異なったページ間や、様々な組み合わせの、ある特定の概念の鍵となるものを思い出させるために使われたと確信するようになった。この図的な「アルファベット」や速記は様々なところで、そのヴォイニッチ文字の興味ある構造体系と似ている。(これについては第4章で扱っている。)これにより、丹念で、入念な、偏見のない分析を全ての絵やその図的要素に対して行い、索引を付け、相参照する事により、この努力はきっと報われるものと信じている。現代の画像処理が可能なモニター端末を使って、もし注意深く理論立てられたものを元に、そのような分析を

行う試験が行われるのならそれはやりがいがあることだろう。(つまり形の意味ある関係を調べている研究者があらかじめある理論を遂行、調査すること。) コンピュータを使った手稿研究に関するものについてはセクション 6.9 でさらに述べる。